

## 【目的の変種発生】 第29回

どんどん決められたことが降ってくる社会の中で、「与えられたこと」をやりながらも、その活動（授業など）からちがう目的の活動を派生させていくことが大事で、そのしくみを梅根は「目的の変種発生 (Heterogenie des Zwecks)」とおさえます（文献①）。少し広くは、「ちがう用途で活用する」ことで、ワットによる蒸気機関は、もとは炭鉱内の排水ポンプに使われていましたが、これが改良されて、すべての機械の動力という「ちがう用途」で活用されて産業革命がすすんでいきます（文献②）。「目的の変種発生」の積み重ねが、学校、社会にひろがり、なにかが出現します。

「もっぱら、諸条件がすべてとこのうことによつて〈事態〉<sup>（ことごと）</sup>が生ずるようにみえるけれども、他面では、事態そのものが諸条件をあつめてそうなつたのです。根拠があるというだけでは非常に不十分です。根拠があるからといって、諸条件なしになにかが自然に



できてくるわけではありませんし、諸条件がいくらそなわつたからといって、根拠がなければものは現実のものとはならないのです。この両方があつて、この両方が自然に一つの事態をつくりあげていくわけです。しかし、これだけかといえは、またそうではなくて、やはり事態そのものがこれらのものを総合していったという、こうした面があるのです。」（文献③）。

多様な教育実践から原則を導き出し、またその原則にあつた実践を展開していくことは〈条件〉をそろえていくことになります。原則の深いところに〈必然性〉を探究し、来たるべき事態になる〈根拠〉をとらえたい。

（研究部・加藤聡二）

### 参考文献

- ① 梅根悟『梅根悟教育著作選集7 問題解決学習』明治図書、1977年（原著は誠文堂新光社、1954年）、102頁。
- ② 豊田堯『市民革命の時代 新書西洋史⑥』（講談社現代新書）講談社、1973年、特に91頁。
- ③ ヘーゲル論理学研究会編著『見田石介ヘーゲル大論理学研究』第2巻、大月書店、1980年、305-306頁。